



TITLE:

ニホンザル自然群の社会構造に関する比較研究(III 共同利用研究2 研究成果)

AUTHOR(S):

小山, 直樹

CITATION:

小山, 直樹. ニホンザル自然群の社会構造に関する比較研究(III 共同利用研究2 研究成果). 霊長類研究所年報 1971, 1: 48-48

ISSUE DATE:

1971-09-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160461>

RIGHT:

ニホンザル自然群の社会構造に関する比較研究

小山直樹 (大阪市大・理・生物*)

筆者は霊長類研究所における共同研究の一環として、以下のようなニホンザルの群れの比較社会学的研究を行った。まず1969年8月1日～10月30日までの前期には、広島県深安郡加茂町山野付近とその約10km離れた西隣の芦品郡新市町金丸付近において、純野性のニホンザルの群れの観察を行ない、これまで研究者によって報告されたことのなかった二つの群れを発見することができた。その一つは金丸の群れと名づけた100～150頭と推定される大型の群れであり、他の一つは龍頭の群れと名づけた30～50頭の中小型の群れである。金丸の群れの特徴は、一つの部落を取り囲むような形で、nomadismを行なっていることであり、ドーナツ型の nomadic range をもっていることであった。この部落には、小学校や簡易郵便局、田畑などが一つの小さな山塊を中心に配置されていて、四方を望見することができる。群れはこの部落を避けるような形で nomadism を行なっているのであるが、その nomadic range の外周も、人家と接触していて、内からと外からの両面から、群れの行動域が圧迫されているといえる状態である。恐らくかつては群れの行動域はその全域に及んでいたと思われるが、人間の侵入によってドーナツ型になったものと推定されるのである。

つぎに龍頭の群れについて記しておこう。この群れは龍頭滝を中心に遊牧を行なっていて、筆者は最高23頭まで目撃することができた。ここは東西約2km、南北約1.5kmの三角形に、龍頭峡鳥獣保護区がもうけられており、群れはこの保護区の広さの数倍を行動域としている。龍頭滝の東北2kmには狼鳴峡と呼ばれる所があるが、ここに出没する群れは恐らく龍頭の群れとは別の群れであろう。そしてこれらの峡を形作っている小田川は、高梁川の一支流であって、高梁市の臥牛山とは、直線距離にして東北東約26kmの距離にある。また帝釈峡は西北約20kmの距離にあって、やはり高梁川の一支流である東城川の支流、帝釈川の一部をなす。

龍頭の群れ及び金丸の群れとこのような位置関係にある、帝釈峡の群れ及び臥牛山の群れについて、筆者は短期の踏査を行なった。水原(1957)が報告した帝釈峡A群は、長い間餌づけされてきていたが、1968年8月を境に餌を与えておらず、筆者の短期間の調査では、この群れを発見できなかった。しかし、帝釈峡の南西部を中心

として、サルによる農作物の被害が起っており、この群れがこの野荒しに関与している可能性がある。臥牛山の群れについては古屋(1960, 1968, 1969)の詳細な報告があり、群れから離脱した solitary male や農作物の被害等についての記述がある。

これら帝釈峡A群や臥牛山群とちがって、一度も餌づけされていない群れである龍頭の群れや金丸の群れにおいても、農作物の被害があるが、現在までのところ後者が前者とちがっているのは、ナシ、カキ、クリなどの果樹以外は、ほとんど荒らさないといい点である。これは人間による行動域の縮小圧力とは無関係に、食物認識の culture が、群れ毎に相異していることに由来する可能性があるといえるかもしれない。

つぎに、1969年12月1日から1970年2月28日までの後期には、筆者が長年手がけてきた嵐山群の観察を行なった。この観察には、大阪市立大学理学部生物学教室の乗越皓司、真野哲三両氏の御協力があった。

この群れは、1964年3月には125頭であったが、1966年3月には163頭になり、同年6月、群れの分裂が起った。1967年3月には、A群94頭、B群86頭であったが、現在では両群とも約140頭から成っている。そして分裂後、両群はAo, Zolaのleader maleによって率いられていたが、劣位の群れであるA群のleader male Aoは失踪して、現在のはかつてsecond-ranking maleであった出自不明のWがleader maleとなっている。

この嵐山群は、血縁関係のよくわかった群れであるが、筆者はこの群れをニホンザルの群れの一つのstandardにおいて、今後とも他の群れと、その社会構造を比較してゆくつもりである。短期間の調査のため、個体識別のやり直しなどで時間がかかり、まだ十分な成果をあげるまでには至っていない状態で調査が終ってしまったが、嵐山の二つの群れでみられた solitary male の新たな加入や、オス個体の頻繁な転籍や、ヒトリザル化などの問題も、餌づけされていない群れ間における新しい culture の伝播という観点からとらえ直すことが出来るものと期待している。

霊長類個体群の変動要因に関する研究

“木島カニクイザルの群れにおこ

った分裂について”

古屋 義 男 (静岡女子大・生物)

1. はじめに

今回の研究対象となった木島の群れは、1958年6月に18頭のカニクイザル (*Macaca irus*) を東南アジアより

* 1970年8月より、霊長研